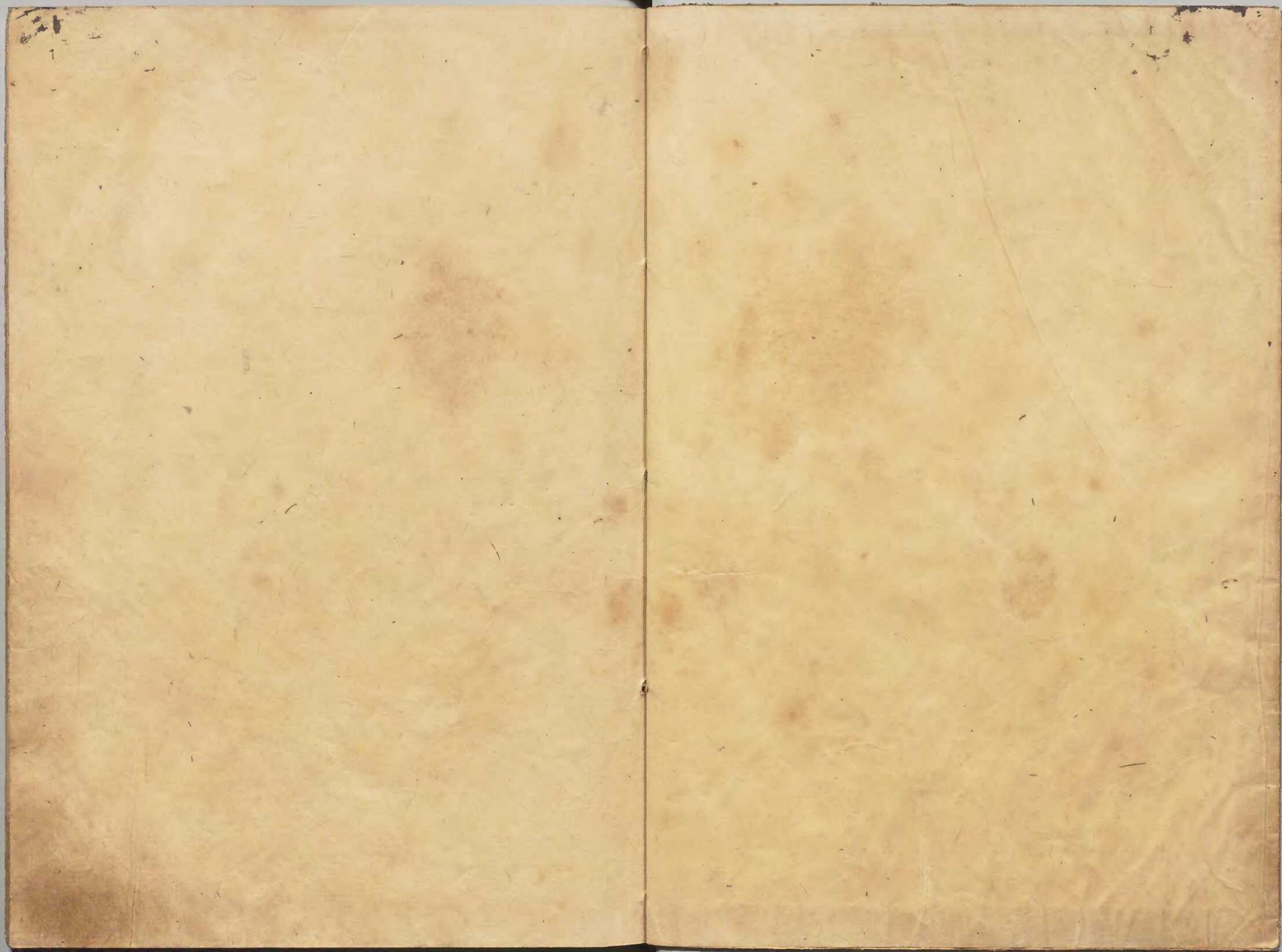


寛永諸家譜

藤原氏丙十冊之内一
秀郷流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186(87)
函號	76 1





錦鴻

近藤

寛永諸家系圖傳

藤原氏

丙一の家

秀郷流

錦鴻

しづめのまがた造寺や林とのら
錦鴻とあ〜〜

大織冠たいしやくかん
代うしろ

魚名

汀邊ついでた大屋たいおや

淺草文庫

藤成

冬議

豊澤

下野少掾

村雄

下野の掾

秀郷

依孫右 結守府少将

千常

結守府將軍

文脩

結守府少将

文行

左衛門尉

母 利仁將軍の女

云光

相模守

云清

伊豆守

季清

左衛門尉

後五位

● 季益 とくまさ

宿阿 しゆくあ

龍造寺 りゆうぞうじ

安秀 やすひで

榮秀 えいひで

家氏 いへうぢ

胤家 いんけ

新造寺豊前守 しんぞうじぶんでんしゅ

法名定三郎 ほうみやうじやうざぶろう

家兼 いへかね

山城守 やましろのりょうしゅ

法名剛忠 ほうみやうごうちゅう

胤家乃三男家督とけいぐ いんけのさんなんけかくとけいぐ

家純 いへじゆん

豊法守 ぶへうのりょうしゅ

法名鑑藏 ほうみやうかんざう

嫡女

鍋橋河守清房が妻

法名華溪

家門

和泉守

家純の養子也なれ美る家純の弟也

法名素雲

周家

六角次郎

家門の養子と称ふ美る家純の養子あり

早世 法名鼎伯

隆信

山城守

隆信牧度の戦場より出張して大

勝利を得くろれ名を九郎とす

しん

汲家

母を家通が兄家負が子流尚がじとめ
なり周家の子世一華漢死すの候
藩に母も〜〜び端端流河も清原よ
嫁と

享保十二年三月二十四日五十六歳
て卒と 法名泰教

民部左補 辰巳位下 侍従

出茂

享保十二年十月二日五十二歳
卒と 法名大雲

辰巳位下 和賀守

出茂の事母子と好む其を疎はる清原子
太宰少貳の事なり

享保十二年三月二十四日五十九歳
國皇女友宗麟との御元二人を〜

千五百騎を引く肥前此島津侯と相討
て、其後しむじつひをささうの勝利
を得たり

元龜元年四月二十三日宗廟大軍と

相討つ、筑後の國を良山より本張と其

先陣は、肥前の島神崎郡婦村

と討つ、其後あまきとつらぬあまき村百人

と討つ

同年大友の節大共を引く

より肥前の小城郡よりとり今山
陣をとり八月廿日あけられ、其後
二の條を引く大友の陣を破る
り、これをあまき八郎を討つ、其後
九州のりりあまきとつらぬ軍を
あまき城をとり、其事二十度り、
或は自ら鉦鼓とつらぬ剛毅とつらぬ
首とつらぬ事あけく、あまきとつらぬ
其後とつらぬ

延治十一年秋造寺改家病氣よより
て家督と直茂より移つた
文禄年中渡海し朝鮮より入る
とくみく威鏡道吉別りつる
教方の今我りしつる
歌をたがふ事おほ
享長二年冬尾秀吉薨去りし
ゆく直茂朝鮮よりつる
各部の務直茂とつる
光元寺長光元依

をまのりく

東照大権現よりつる
の首と云ふとま

大権現清座よりつる
伏見の城より清座をうり
らまん事といふあま
つる此より
つる威あり

同四年

大権現伏見より清座の
奇信長軍

阿波守りよりつくと方志づつあ

ごれとあ

右徳院殿乃法巻取

崇源院殿しゅうげん乃法巻取しゅうげんは依た刀の乃のおけりす

大権現より柳原式部左補原政と法

使つかやのくものとの法巻取しゅうげんの

法巻取しゅうげんを法巻取しゅうげんの領りやうりうははめ

給たまへし御ごりのなりよく調護てうご

そくまらあのつつやはききれれむ

法巻取しゅうげんは自みづかとのけけそそははるる今いまががここが

家人けにんとのりり卒そつ介けりり似にららといいども

大権現のよきをうじうじとのそそままつつああべべあ

りののいいんん仲なかつ巻ま取と法しゅう巻げんををううはは

そそははるる法しゅう巻げんくくままののりりななりりあありり

ええどどああ
ええららとと

大権現ままくくししめめららとと法しゅう巻げんあり

そそぞぞののりりくくととおおのの事ことななりりゆゆり

その事ことととままののりりあありり

元和四年六月三日八十一歳一く
卒しと 法名日峰にっぽう

高房たかふらう

位下ゐげ 新造寺しんぞう 駿河守しゅんがのりょう
重茂しげもちの養子やしよとすまるまるまるま 政家まさけの三男さんなん
なり

延和十二年九月六日二十二歳一く
卒しと 法名天祐てんす

勝茂かつしげ

位下ゐげ 信濃守しんのうりょう

長元年ちやうげん 兵をへいにを川がわををくく物もの鮮せんり
い子いこ父ちち重茂しげもちとすまるまるまるま 武切ぶきりとすまるまるまるま
ひ捕利とらををひひととり

同三年どうさん 歸朝きしやうなり

大権現おほごんげん 長盛ちやうせいの女むすめををかかりりな

い猪いしよ茂もちのあにあに婚こん娶とのの礼らいあり

寛永三年かんえいさん 八月二十七日はつがつにじちゅうにち 位下ゐげ 下げる

叙一侍返り伊豆

同十四年此冬来る志了ん宗門の
族肥前の國馬入りおひく一揆を
おろし原の城に指移のるは播磨上
さ入りおろく諸將やお好く馬
りともひこの同十四年二月二十方
勝茂結軍入りさるら一萬に攻入
城中をさるらひ翌二十八日一揆のぬ
原へくは誅戮し城をおろし

元茂

紀伊守

元和五年十二月晦の辰五位下り叙
寛永十四年播茂也お好く馬
りおろく

重宗

死守

忠直

肥前守 早世

母長郎内膳正忠盛のむすめ

元和元年十二月二十六日没位下

叙

右近衛少輔の字あきむね、相平乃

稱号とありぬ

直澄

甲斐守 母とす。同。

茂継

寛永十二年十二月晦の位下叙
同十四年膳茂とす。くま馬、赴く
同十五年 上よりきりひ霜か
母をとりく素女とす

形部左衛門 母とす。同。

寛永十七年十二月二十九日没位

下り叙

女子

女子

上うへ杖つゑ彈だん正ただ少すく彌や定じやう勝かつがが妻つまとと形かたちりり早はや世よ
母ははとと入いりりおおちちるる

杉すぎ平へいににままるる以も忠ちゆう房ぶうのの妻つま 母ははとと入いりりおおちちるる

某

霜しも奴ぬ

母ははとと杉すぎ平へい下げ総そう守しゆう清せい匠しゆうののじじととああ

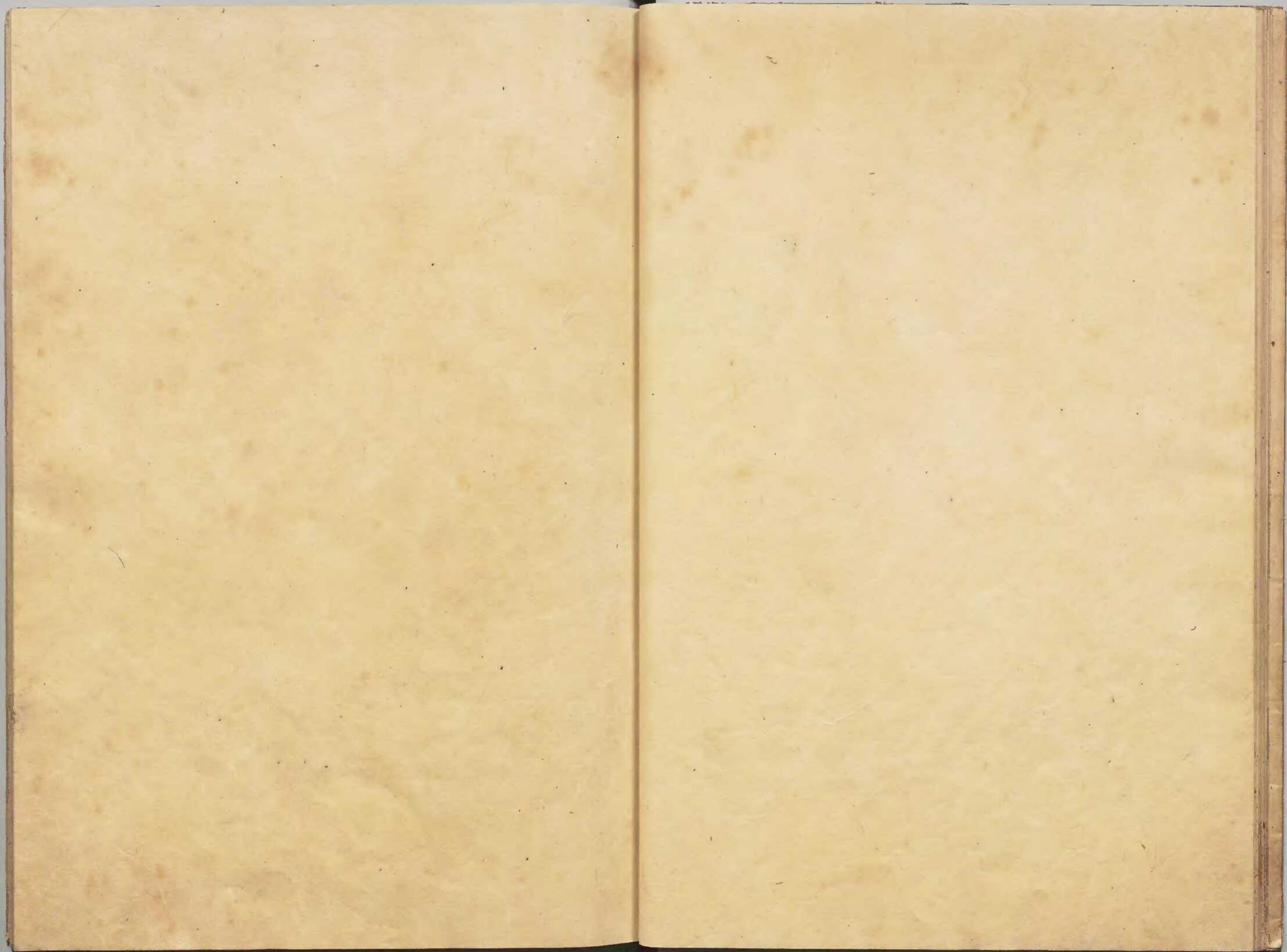
家いへ紋もん

若わ荷か丸まる

妙たう造ぞう寺てい

家いへ紋もん

日ひ小こ日ひ足あし



●直満ちかみち

近藤えんどう

元祖もとむらと名取なとりの五八ごはち名郡なぐん宇利うり在の
任人にんなり

冬ふゆ別わか宇利うり在の任人にん

注しゆ祈いのちして為な業わざと号なづせ

享徳二年十一月二十一日じやうとくにふたにねんじゅういちがつにじゅういちにちに

此阿比ご中終

満用

天文十年五月二十一日より死す
法名還阿

忠用

勘助 のら固防守と号す
まは六年五月一日より死す 法名一安

原用

勘助 石見守 生國冬河

宇利の城より征す

永禄十一年冬河の西とくを

東照大権現より輝服をいざと妻別

まゝに原をいざと入りよりて菅沼

次所右衛門尉本三郎左衛門尉は原用

清味と名り忠義とわらんで勅賞

を阿くともあつたこのゆひに御判の

御誓書と申すはこれと案すいしく
 今度あ三人の御志井谷筋を御一
 下おれし旨本中進給之取く出盡
 知り分く事永くお遠為不入扶持
 早給は甲州彼知り分る様く彼
 中極く進退し御見致しる事迄
 御心成不度申す

誓詞これあり

永禄十一年十二月十二日 家康御判

菅沼次郎右衛門左
 左衛門見守左
 右衛門左衛門
 今度孝州へ付る事ある三人の志
 節井谷筋の御案内下り出く御志
 候へども、上は御志、御志、御志
 御事

- 一 井谷海藏新知不知一巻お盡事
- 一 二僕左衛門海藏一巻く事 但是五百

費文事

一言園者子方事 一言利本

一氣架つ 一かんゆのり 一まんごく橋つる

一山田 一川合 一わやじ

一五領 一野色 一かんさう

一あんま 一人見并 新橋小沢渡

者彼中付く分 伊成爲不入 五お遠水

爲新飲 出並取也并 於此地 田原之百

費文下出並也 井若飲く 亦心付事付

内戴子費文何事 皆地可出並也 爲後
甲別の事 移くら 甲事は 以起 諸文
P 定ふ事 進退 掛く P 理 亦お遠
お遠也 事と 領 何言 成は 何換く 忠告
先判 於此 處 於此 之 事 お遠 事
お遠 事

十二月十二日 家康御在判

三官沼決命右衛門左衛門

近看石見守殿

御本三郎大進

菅沼新八郎右の川判。拙書とお志を

〜〜〜

今度井谷調儀迄廻ら候申上

拙の控を右向の御申上納百性

此云お遠方より被申上候相違

類父郷五拾貫よりお添進申上

此と志向候別は無沙等申上

趣意は、其下合の今度長崎

よりらおの知方へ候届之間

おの拙志候人、其上志願云

おのるおト

拙文お達し候

永禄十一年 菅沼新八郎

拾月十二日 定盈

今泉守忠

延傳

近海石川守殿
御本意申上候

右ノ外石見守康用知ノ分書付

- 一 宇利村
- 一 下宇利村
- 一 吉川村
- 一 尾田村
- 一 彦根村
- 一 津守村
- 一 小波田村
- 一 桑田村

合貳百貳拾壹貫文

大指現是傍ノ一ノサハシマセ一ノ時季別

沙征伐あることこのし祿康用ノリ

仰つけしあるものゝに康用彦別宇利

の城を由るよりよりのてまづ是男秀用

をく回ふ山野を田一ノ一ノほひ

遠別井谷とら山川道路の案内と

祿本ありたり刀をきりそのくら菅沼

大指現よりと一ノそまくりすふしら

案内とてせしりいまご二年なり

さびり奉別帰服とあるより刑部
堀江溪松の三乃城これ 慶下は属と
うれらあはあすけ三人をさし
先也と一をゆらうれら甲州の共
まゝりて守利の城をかこむと康用
小堀とさうく強敵を逃らし衛利
をゆく制をわらふ
大権現清盛のありに 清盛状を下し
う海よこれ乃とたぐりあわく

あじくそつひゆへりおろく病を
かりくり歩らふら
奉別帰服のら武田信玄を押ん
菅沼純本なりびり康用と
奉別山野を向りてをさし
とてと井若れ三人也
とて十六年三月十二日を
おろく七十二歳と
全切

秀用

勘助 登助 平左衛門 のら石見守と号

長谷川忠清よりうまれを別井と号

位と

永禄十二年を別堀江の城をせり

と此秀用甲冑を著せんとて鎧を

あらしを城戸のうらよとていふ名

元龜三年三方原合戦乃ら位を

刑部より越年一山縣と即ち衆と

井平村より越年と考用た

家人長瀬と衆とあるく在

あり力とありとありとありと

歎六人うらと山縣これをうら

て罪を百姓より捕とありとありと

用夫父を村と考用これをうら

をけ

享和三年長篠合戦の母須井在村

諸兵とてつゝく鴨巣をせし秀用素内
者ゆかりてしむせじひ政とてしり
同十年を別福方原乃城よりおろし
武田勝頼をせしゆりしとて秀用
大指現乃津馬のよまふありて一番のま
を別横次和馬とて神の城を攻めし
とて秀用首七級をうらとて
同七年勝頼駿河田中此城よりしり
とて

大指現これを征伐ししゆりし
秀用久多此指つゝありしとて
同十年信州乙事退陣の時秀用
麾下小房ししゆりしとて
しむせじひ郎はむりしとて
同十一年信州小岩合戦の時
同十二年長久多合戦の時
をりしゆりしとて
井伊兵部が指をせしゆりし
とて秀用とありしゆりしとて

を逃にりし大たり勝か事じと得とり

同十一年小田原陣のも又また変へ改かす

属しと変へ改か三王の篠曲を攻せとす

とん秀しゆ用ようひらうに郭かく内うちとうひ

乃すくく変へ改かりしぐぐこれのようひと

変へ改か事じゆゆとく宗むねとく

同十九年奥おく別べつ九く部ぶ一いつ揆けんのの也なり

変へ改かりし属し一いつてて登のぼ向むかとと款けん城じやう中ちゆうとと

録ろくををつつここいいごご一いつゆゆせせここ一いつのの秀しゆ用よう

変へ改かすすげげくくいいくく我われりりじじひひてて款けん乃なり

録ろくををううぐぐひひらら一いつとと秀しゆ用よう城じやう戸こ

口くちりりじじひひくく録ろくををううぐぐよよ変へ改か乃なりとと

これを志しれり

同十九年元和の大坂の度なり

陣ぢん一いつりり足あ種しゆののももののみみ十じゆ人にんをを録ろくり

中ちゆう旗き下かりり也なり

寛かん永えい元げん年ねん相あ別べつ小せう田でん原げんのの城じやう為なりとと勅しやく

同二年二月十日に位ゐ下かりり叙しよせせとと

寛かん永えい元げん年ねん相あ別べつ小せう田でん原げんのの城じやう為なりとと勅しやく

石見守り伊豆いしみのり

同八年二月六日ハ十五歳いしんして卒しゆす
法名清不はうにん

用忠もちう

小十郎せうじうのら八歳はちさいと号なづす

春別はるべつ宇利うりりうまりうま

天正十二年てんしうじふにねん長久ちかくも合あ我われの時とき

首級しゆけいといふらり

元和元年げんわげん四月しがつ廿日にじふにちお別わかれおわけ

一
五十七歳いそとせ法名はうにん淨光じゆんくわう

用尹もちひん

小十郎せうじう生國なまくにお換か

春別はるべつ井岩いゐお別わか中郡なかつぐん乃なりうらまま

おわく五十三いそ石いしの末すえ地ぢと終はるら

用政もちせい

小六せうろく金丸かねまるのら幼者おなご也なり号なづす

小田原陣せうでんげん乃なりととささ見み考かう用もちととああひ

とも小妻政の居る二王藤曲端と政
少の敵敵戸のより鐘とついで一
そこのよこれとに用政のれ鐘と
びとり二ヶ所病とつゆそのら
前田孫四郎の居して使番とるは
る長五年加別大正寺合戦の時
城中へのり入思母衣けつる武者と
鐘を何せ言ふをゆとり志のれとな
らず城中はくくもへつれりあを

うらみとりて敵を討らる藤四郎
新収一風状をさづけそののこ
飲地と加倍と
大垣お倉乃侍陣
上津院殿の借存一侍使番と形を
寛永二年七月七日に戸入りおひく
死と歳五十八 法名宗志

冬季用ふりて考者よまきんも
 けしき考者よ松美しと黒の馬と
 考改が郎は白坂侍苑高名と季用一
 同り考者よまきんも又もと
 奥別陣の考者よ松美しと黒の馬と
 大杉現りけしき考者よ
 文禄元年船解五征伐の考者よ
 小姓とありて肥前名護屋より
 考者よ五年関原清陣の考者よ

杉の政とありて清旗下り居と
 還御の考者よ伏見より考者よ
 三千石餘を考者よ
 同十七年八月六日考者よ
 四十歳よりて死と 名成考者よ

用可

五尾 縫居考者よ
 同五井考者よ
 越前中納言考者よ
 考者よ

子息直忠乃と記しりて
高政と形を

元和元年しつとしつとを別
濱松しつとしつと

白蓮院殿しつとしつと

父秀用しつとしつとに大坂御陣しつと

供奉しつと五月七日沙合戦しつとの時

と主寺しつとしつとおわく言ふ

御陣しつとのら 命しつととつぬり

秀用しつとしつとて足輕しつと乃との五十人
をあつた

同一年正月しつとと使しつとをうけしゆり

越前しつとしつとしつと

相州大磯しつとしつと落馬しつと二月十日

り死しつと年四十一 法名道安しつと

用義しつと

秀九郎 生國下しつと総しつと

寛永三年十月十一日しつと十一

赤心く死に 法名淨鉄

用将

長九郎 生國氏苑

寛永八年 祖父考用の家督と
しさを列井谷よもわくみふる
餘の地と津頃と

用行

八苦湯のら五石と号と 生國神お
武列りうり位と

寛永九年七月六日 津歩りの領中
なれ

同年十二月 布衣と恙とる事を
ゆかると

同十年 女知を列 養原二子五石
乃か、五石とく、り、地、こ、子、石、と、録、と

用一

縫角助

生國同あ

を江気賀一

うつり信也

命とつりゆりく
本返越此実と

貞用

勘助

のら登助と号

幸別り

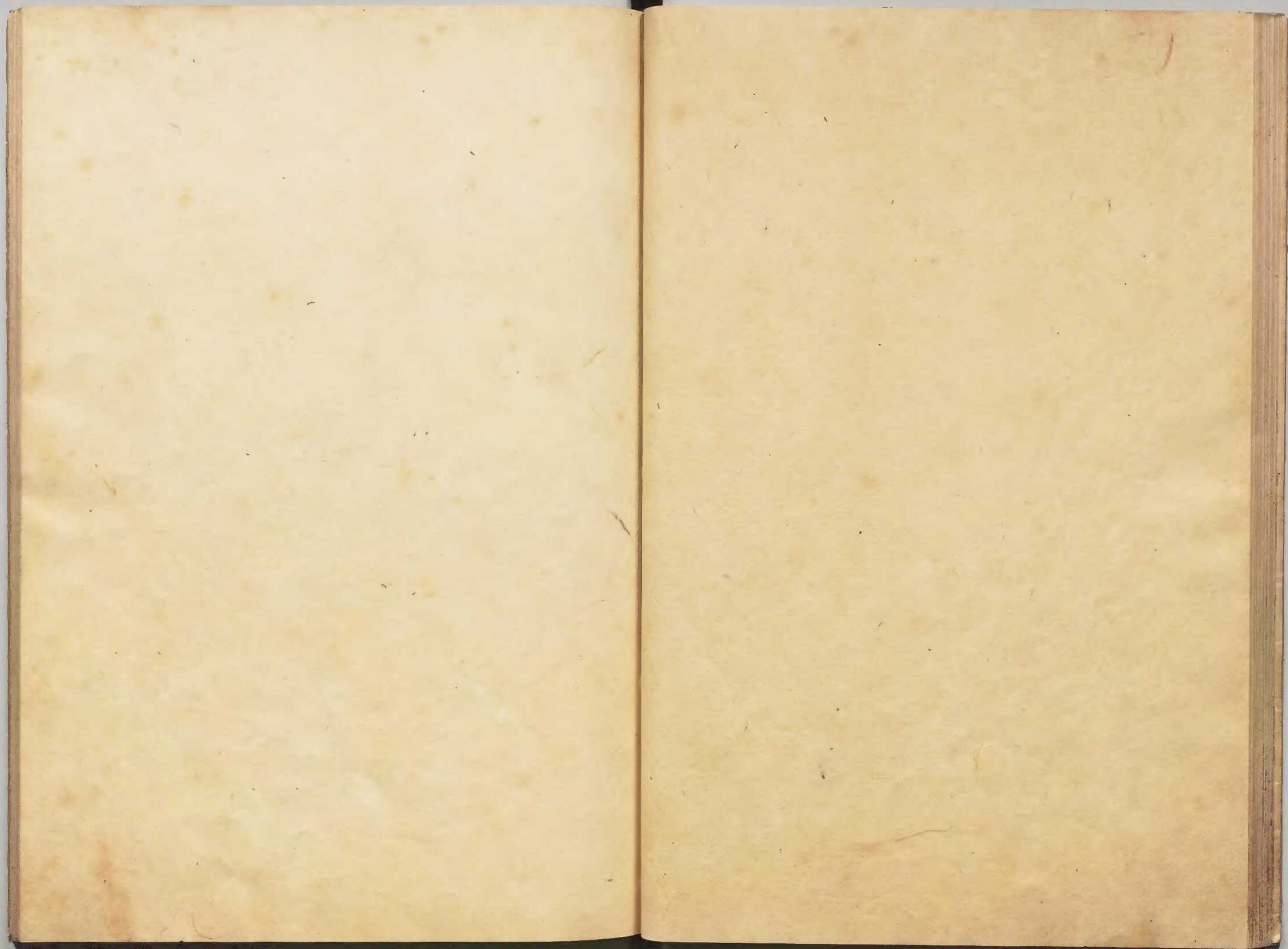
う海邊井谷此由金指り信也

寛永八年与力五騎
是極五十一人

同九年十二月
申衣と总正り事と
梅ふうれ

家紋

康角乃丸



某 ま

近藤 えんどう

九十郎 うま
生家

尾別 お 智那 ち 郡 ぐん 履 り 魚 り の り 里 り

重郷 しげ

海 う 五 ご 左 さ 衛 ゑ

生 な 國 くに 同 どう 家 け

美 み 流 りゅう の の 必 かならず 方 かた 也 なり

郡男天村より信長
織田信長の家臣河見仙千代より信長
へ云ふ六年四月二十二日江別安去
おのゝくおと

重勝

四郎右衛門 信長河見仙千代より信長
へ云ふ六年四月二十二日江別安去
おのゝくおと

信長河見仙千代より信長
へ云ふ六年四月二十二日江別安去
おのゝくおと

天正十一年小田原の陣中よりおろしく
秀正病死をうらみていしく我志せむ
うけす二男美能守とらりしるべし
せりこれと記美能守お庄より
おらぶゆへ越前よりうらしく美能守
おらり居候と
寛永二年四月二日を居考去考政
嫡子たる特考治り越後のおと封
そゆよりこ同朱下のおらとらん
死す

子勝一万余をへゆ
同九年正月二十四日城川におろく
死す

正成

七島右衛門のら信濃守を考
越前のお庄より生る
美川堀考政が七男なりて正成は八月十
日生る

まき越後の國よりまきつり大坂の城ある
の丸よりおあぐ

東照大権現よりお湯一そそまつる時
守備が先祖のものとせし海より手
勝云うそそまつるくいとくうま
尾州の住人九十郎といふもの
孫也切のれら記より疏と形のあうし
流浪せしゆり下りくしり事事は
そんとはつはつるまきつり

いしくは祖父九十郎尾州を智
郡も圍れ城を海より忠義といふ
ゆゑにあま多家福才のものなり
ゆゑにあま多家福才のものなり
教命をのりゆゑにれよらそそま
五年に喜正成十三歳より一樹原
式部を物原政が奏者といふ
大権現より湯一そそまつる今年小
山よりびよ関原の陣は信を

幼年より

大権現の御膳番とつとむ

享長八年此春正成十六歳あり

後五位下り叙せし信濃守に任

回九年四月五日正成

大権現の命よりよりて父主掃が四邑

一万石を領せしに越後のあま

濃別にあわく五千石信州川

中津にあわくみふ石とてく二百石乃

地を領せ

大坂あまの御陣より永井左衛門大進

直掃が継やたりと世を承

元和三年九月五日

右酒院殿より四代一百石の川米中を

承領す

同四年六月二十二日江戸入りあわく

死す歳三十一

重宝

織部 生糸駿河

元和四年十二月十二日重宝七歳の
とれ古井大炊政利勝が奏者として
白濱院殿より珠湯一そそまつる
父正成が給知一石をれうら濱川とある
る堀毎のりりう海りり川中嶋又
千石と重宝うら海りり川

中嶋をのりりうら海りり川

同年ある山崎堀常信の役とつとむ

河部海守正次がなりりり

同九年寛永二年御入洛乃中嶋

重宝江戸りりありて清服指御門乃

重宝とほりり

うらり日光山御社泰乃とれ嶋田

彈正少弐利正と重宝うけを海りりて

同取れ清書とほりり

日十一年 御入洛乃節 板倉内膳正
手島が紐とありて 供を以

家の紋 藤の丸

近藤

某

源流

生國冬江

東照大権現より法之りてまらる

正成

権左門

生國冬江

白瀧院殿

將軍家より侍りてまゐる

正利まさとし

次郎八 生國茂むけ

將軍家より侍りてまゐる

音の紋 なりがら と春の丸

近藤

吉成

久田

東照大指現より
元龜三年幸別三方原合戦の時
伊馬乃前より相あはく討死

忠

久内

生國冬河

大指現

右徳院殿

將軍家入り侍りてまゐる

吉次

相芳清

生國相模

右徳院殿

將軍家入り侍りてまゐる

寛永八年二條清城の番と侍りて

同年十一月十九日二條入りおあはれ死

し年三十五 法名唯知

吉正

右馬助

武州沼戸入り生員

家の級

下藤こげりの丸

某

近藤

助右衛門

生國泰江

廣忠卿

りは子

正勝

せいしょう

助右衛門

生國同前

東照大権現

台徳院殿より勅仕しを以

正全

物志集 生國同前

お屏あがりはくすそまらふ

家の紋 と巻の丸

近藤

● 勝後

助右衛門

生玉系河

廣忠卿

行子

勝久

助右衛門

生田河

東照大権現よりけりまらるる

勝利こうし

吉野藩

生國同か

本多作渡守が家人とならる

寛永十六年四月二十三日よる

注名宗仁

勝重こうしげ

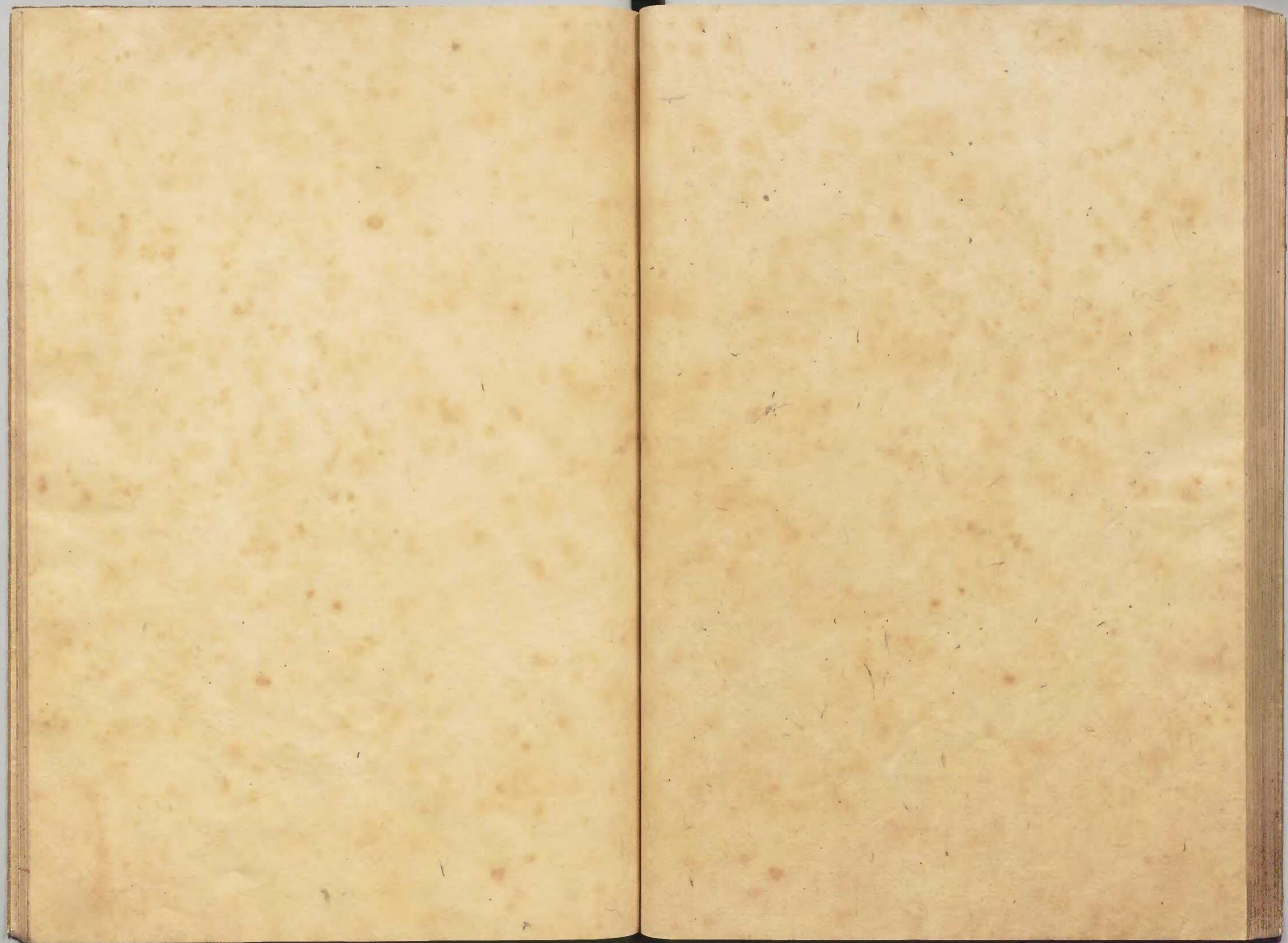
甲斐右衛門

右衛門殿

お守りよりけりまらるる

家の紋

下巻の丸さげまき



近藤

● 秀登 いせのり

高島右衛門

生國春河 いせのり

廣忠卿 いせのり 子

秀勝 いせのり

高島右衛門

生國春河

東照大権現

台徳院殿より修之とてまうが

寛永四年七月二十五歳よりとて

法名道林

秀辰

右郎左衛門

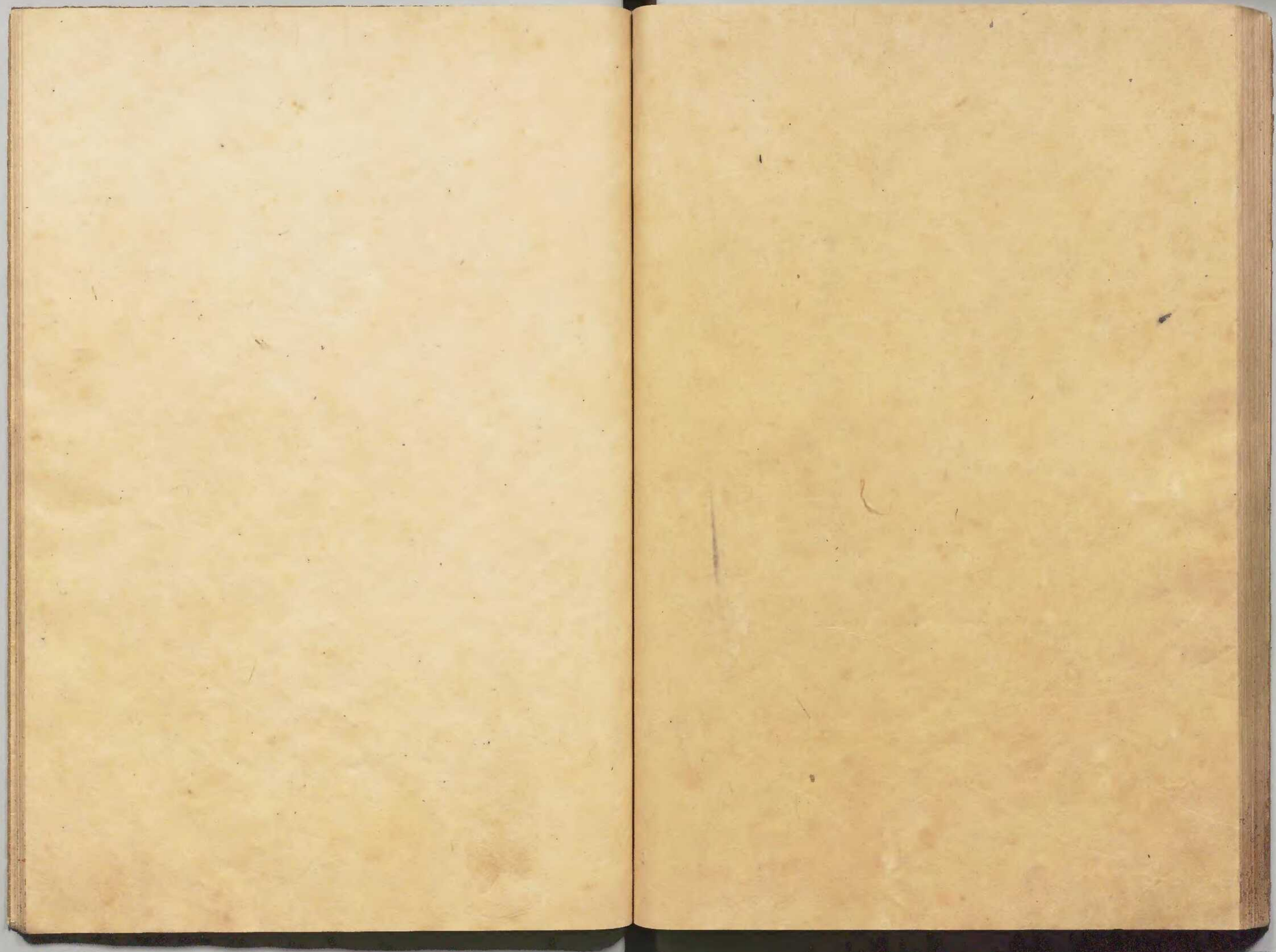
生國氏

台徳院殿

將軍家より修之とてまうが

家の紋

下巻の丸



某

越後えちご

生田なま田た

● 某

了金りょうきん 生田なま桑くわ江え
清原きよはら君きみ乃の清きよ江え

近ちか友とも

廣忠卿の侍と記痛は幾くつと

秀正 いであら

半若湯 生國回

東照大指現りけりしとまらる共

は秀正と申多と跡みあつちせ給

台徳院殿乃御記 仰をうぬまへて

河忠長卿りけり

寛永三年歳七十のりく死

登正 のり

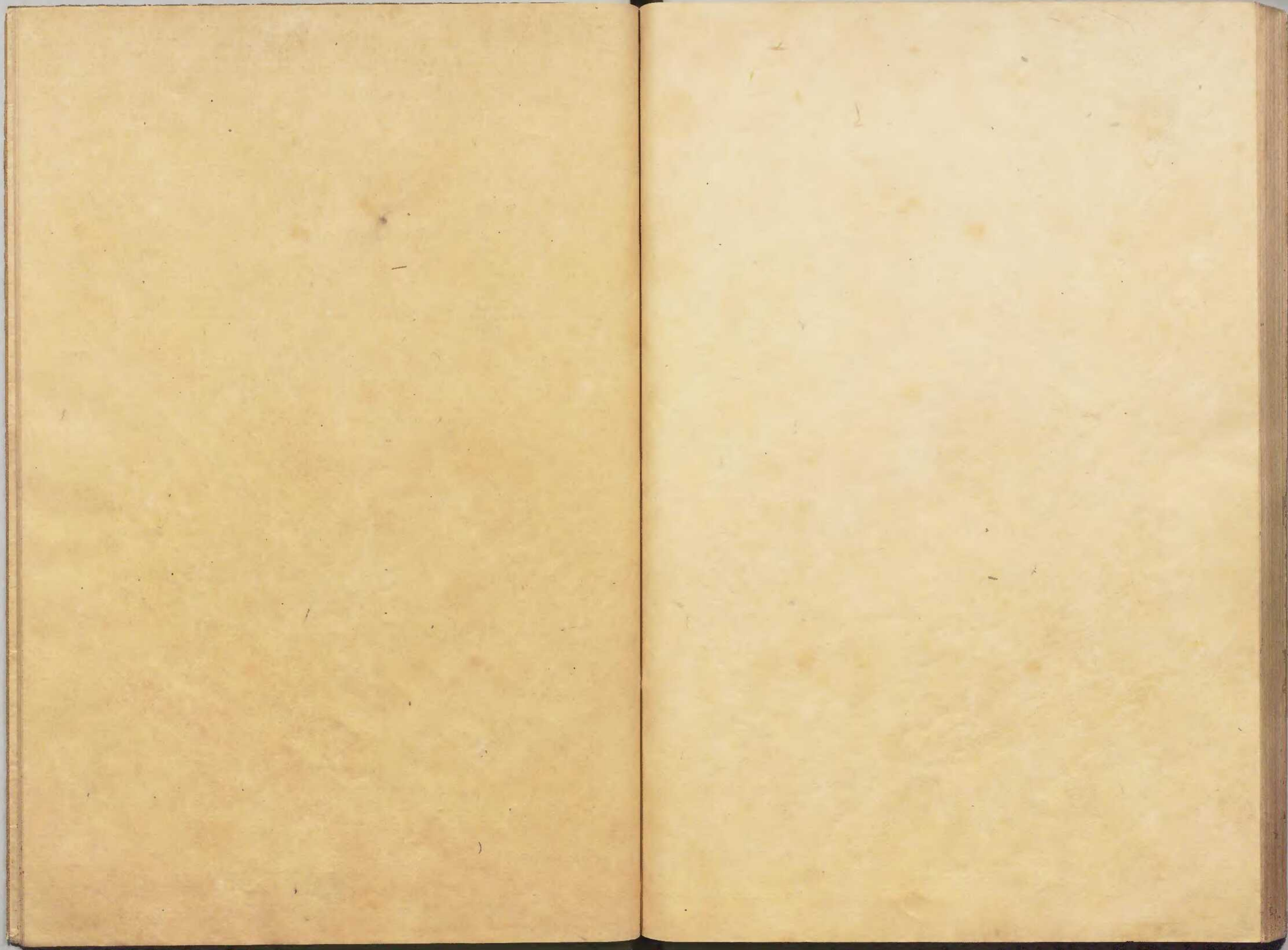
与若湯

生國孝仁

台徳院殿

將軍家りけりしとまらる

家の紋 下藤の丸



秀勝 ひでかつ

右邊門

伊賀

生國同あ

某 たが

治部卿 しよぶ

伊賀 いが

生國桐模 なまがき

小條氏 こじょう

入法 にりほふ

近藤 えんどう

東照大権現

台徳院殿より修了了とまらるる

寛永八年二月十二日

死に 法名 隆順

正勝

西尾

生國式苑

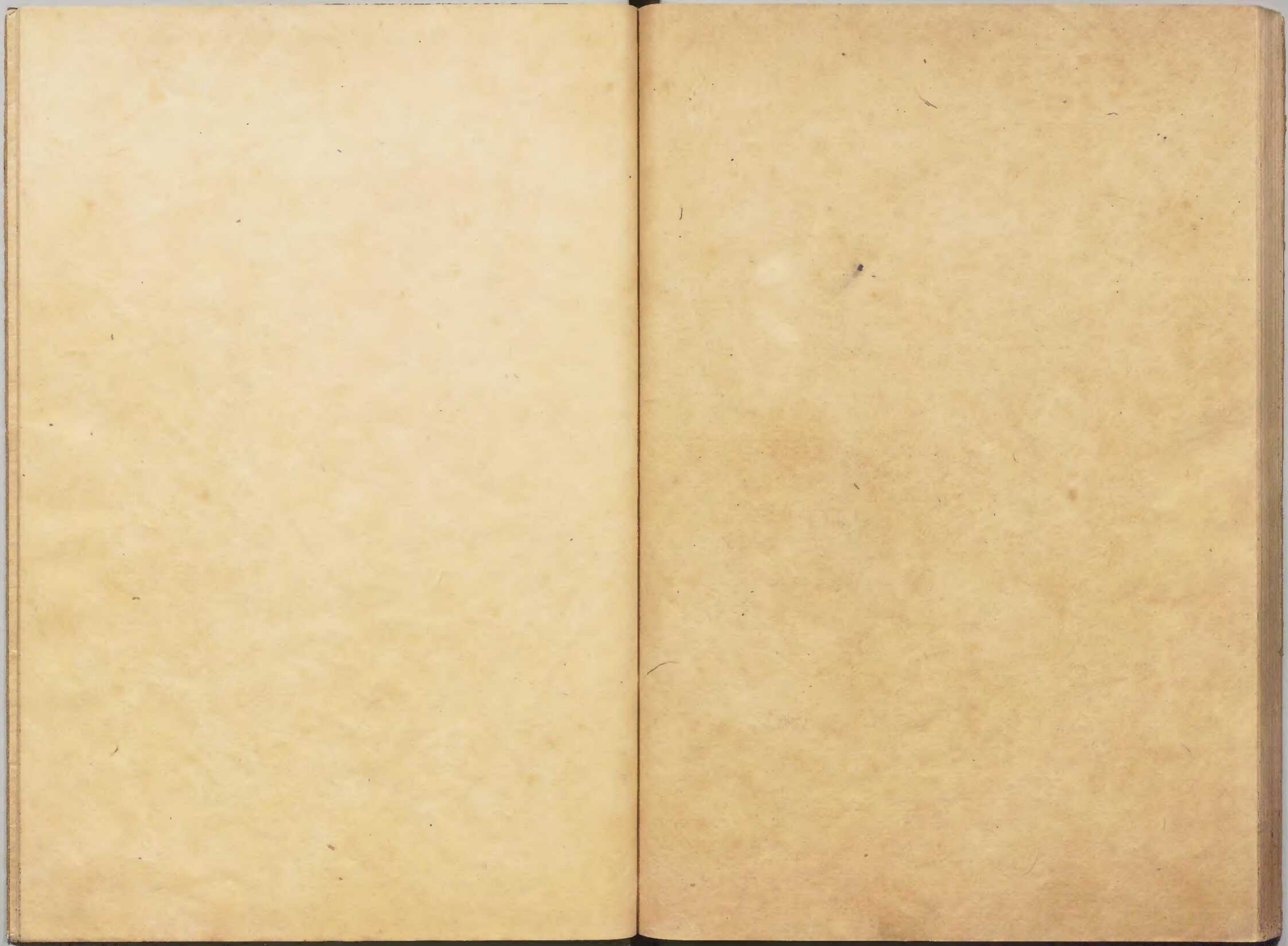
台徳院殿

將軍家より修了了とまらるる

家の紋

遠有羽

桐塔



近藤 えだう

某

惣右郎 そうごろう

生田 なうた 春河 はるが

東照大権現より法之了了そまづり大
清 せい 高 たか と了 りょう 心 しん

某

惣太郎

生酒山城やましろ

旨徳院殿入り侍之了とてまづり大津

毒と侍と也

寛永元年二十一歳よりして死す

正伝まこと

五郎助

將軍家入り侍之を寛永十六年
より大津毒とつとむ

家の紋

軍配図ぐんぱいず

